



独立行政法人 国立病院機構

四国こどもとおとなの医療センター

アートプロジェクト

ー今月のショットー

看護師さんのお仕事風景

時に厳しく、時に優しい、教育担当の師長さんの指示通りに素敵な笑顔を見せてくれる新人看護師さんたち。



2015年 7月号

ー院内の小さな声からー

時々喘息の発作で入院してくる男の子がいます。その子は部屋が決まるとはじめに絵を掛け替えます。そして選ぶ絵はいつも同じ。その絵が下の絵です。美大生だった湊 良太さんが描いてくれた水族館の絵。

男の子は「この絵がいい」と一言。いつも一言です。付き添われているお母さんが「この絵があると気持ちが落ち着くみたいです」と話してくださいました。以前、成人病棟に入院中のおばあちゃんは、絵の掛け替えのお願いに伺った時(他の部屋の患者さんがおばあちゃんの部屋の絵を希望されたので。)手術が終わるまではどうしても替える訳にはいかなかったです。と頑として交換に応じてくれませんでした。その絵は親子の象の絵でした。病室の絵が無言のうちに果たしている役目の大きさに気づかされる出来事でした。

ー看護師さん募集パンフレット制作ー

昨年、教育担当の師長さんと一緒に作った手作りの看護師募集パンフレットが好評で、今度は看護学校の先生から看護学校生募集のパンフレットのデザイン依頼がありました。先生方と向かい合って、本学のどういうところがピーアールポイントで、どんな学生に入学してもらいたいか。一つ一つ質問してゆくと、先生方はびっしりと書き込まれている原稿の中の難しい文言ではなく、少しずつ自分の言葉で話してくださいます。その言葉を拾いながら想いを形にしてゆきます。そうやって出来上がったパンフレットは、原稿を、業者さんに渡してお任せで作成してもらったパンフレットとはひと味違ったオリジナルのものに仕上がります。何より、先生方には自分が作ったという確かな手応えが残ります。病院のアートの仕事は、純粋にアート作品を導入する事以外にも、ボランティアさんの活躍の場を作る事や、今回のような「創造的な改善業務」つまり対話を通じた職員さんとの協働作業も含まれます。私は職員さんとのこんなやり取りが大好きです。一緒に病院を作っている。という手応えがあるからです。そして、一度じっくり話しあった職員さんとは、不思議な絆が生まれます。「あのね。ちょっと相談にのって欲しいことがあるんだけど。」現場からの要望の多さはそのままアートの存在価値につながっています。



作品名：水族館のきらきら

金沢美術工芸大学 湊 良太

医療と美術。それぞれの役割として、治療し健康を保つこと、心を豊にすることだと思いますが、お互いが「よく生きる」という考え方が本質にあるように思います。命に関わる仕事である医療に比べれば、美術にできることはほんのささやかなことかもしれませんが、絵画には人の心を揺れ動かし、それが生命力になることを信じています。とはいっても、あまり大げさには考えておらず、楽な気持ちで和やかに見ていただければ幸いです。描いた絵を見てもらえること、それに反応してもらえることそのものが次の絵を描く原動力に繋がります。今回描いた絵はいつも学校で描いている絵とは描き方もモチーフも異なるのですが、どちらもふとした時に見た風景で、青を基調とした色で落ち着いた画面作りを目指しました。病院の方々や患者さん、来院された方に心身ともに健康でいることができることを願っています。